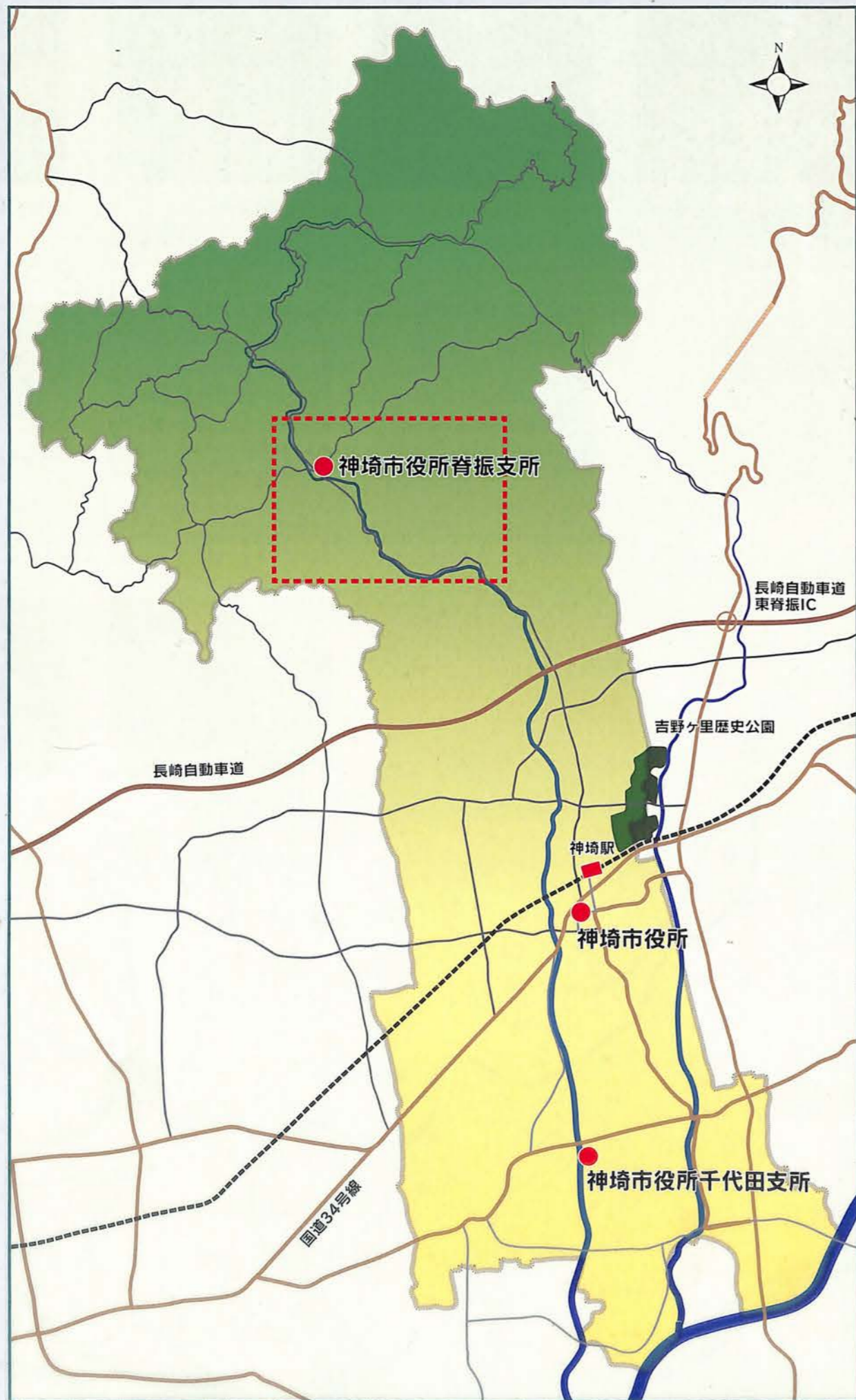


発行

神崎市役所 総務企画部  
政策推進室

0952(37)0153



No.11 散策マップの位置と範囲

かんざきを歩こう  
No.11

佐賀県最初の水力発電所

# 広滝水力発電所 散策マップ

## 佐賀県最初の水力発電所 佐賀電燈の始まり

神崎市脊振町広滝に所在する「広滝水力発電所」は、明治41年(1908)に発電を開始した佐賀県最初の水力発電所です。この発電所で作られた電気、佐賀に電燈の時代が始まります。

広滝水力発電所は、博多電灯の役員であった佐賀県出身の実業家牟田万次郎が、城原川での水力発電を行い、福岡へ送電する計画に始まります。しかし、この計画は博多電灯による事業化は賛同を得られず、牟田万次郎は個人で城原川の水利権を取得し水力発電所建設に動き出しています。

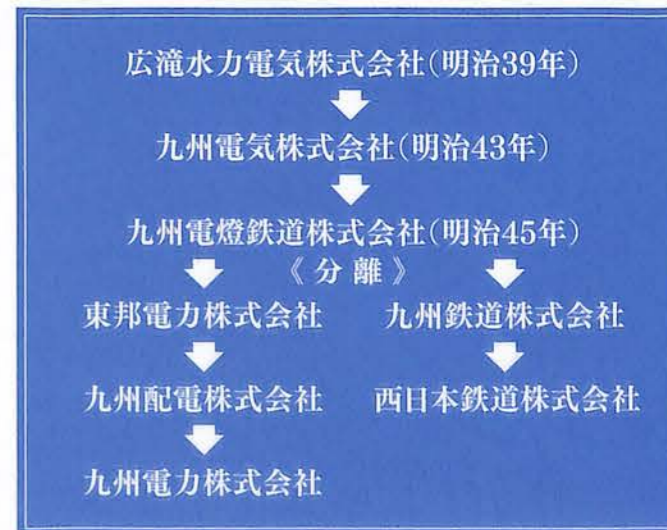
この水力発電所建設計画には、我が国の電気化学工業の先駆者で実業家である野口遵の助言や、東京大学電気工学教授・電気学会会長を務めた小城出身の中野初子による水力発電事業の適地調査により、脊振の城原川流域が水力発電所建設に絶好の地であるとの結果により、脊振広滝の地に水力を利用した発電所建設が動き出します。

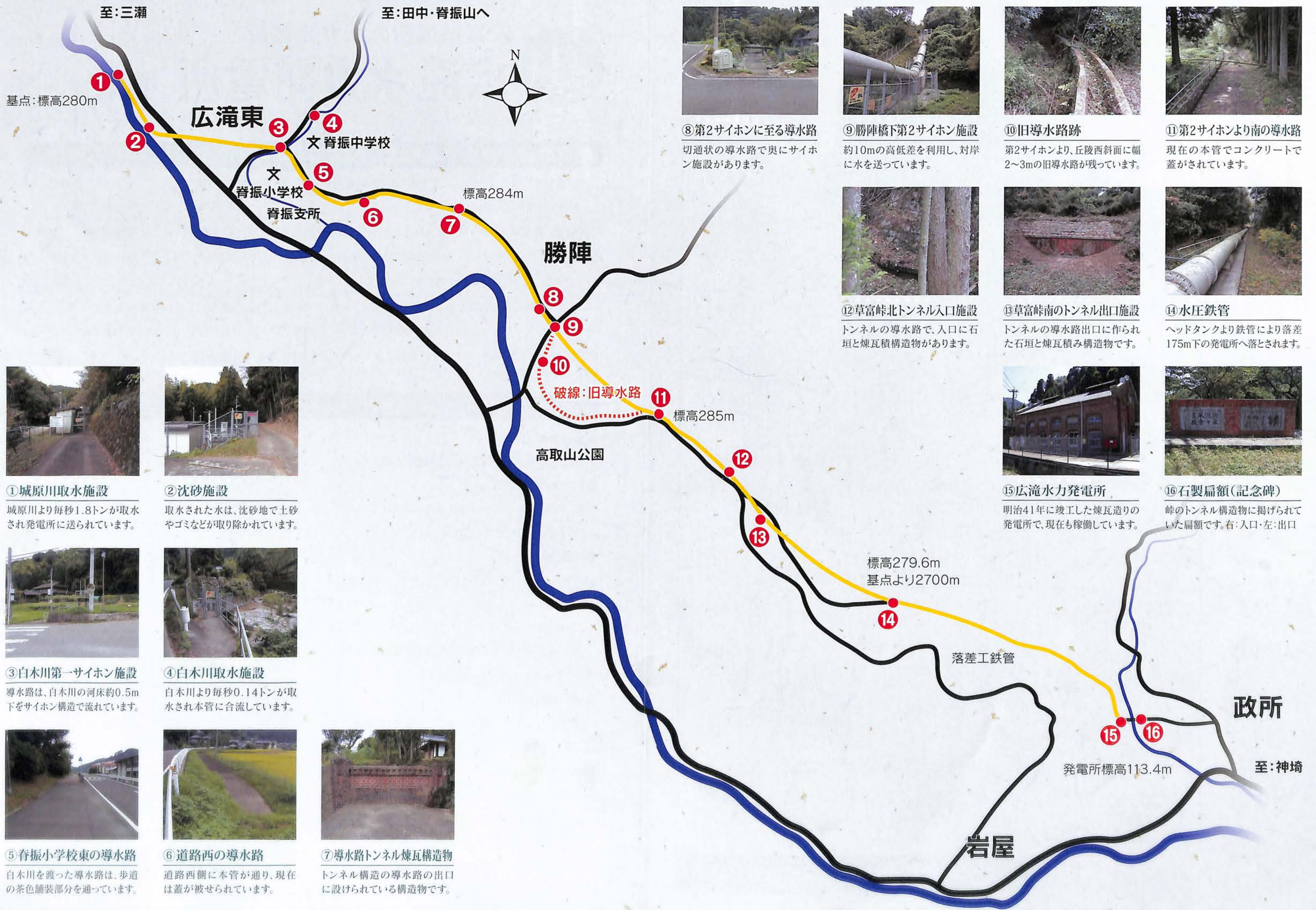
## 広滝水力発電所建設の流れ

- 明治36年(1903)  
6月に牟田万次郎が城原川の水利権を取得する。
- 明治38年(1905)  
電力を福岡市・佐賀市・久留米市に送電する計画で、「三市水電会社」設立を申請するが却下される。
- 明治39年(1906)  
佐賀県内への電力供給計画に改め「広滝水力電気」設立の認可を得る。設立には、牟田万次郎・佐賀百六銀行頭取の中野致明・栄銀行頭取の伊丹弥太郎・深川造船所の深川文十等が発起人となり、同年11月4日に「広滝水力電気会社」が発足する。
- 明治40年(1907)  
広滝水力発電所の建設に着手。工事は、松尾組が中心となって請負。
- 明治41年(1908)  
発電所竣工。出力500キロワット発電機2基を設置し、総出力1,000キロワットの当時九州最大規模の発電所として発電が開始される。佐賀市・神崎地域に電燈が灯り、電気の時代が幕を開けることとなります。

## 〔発電所建設に用いられた資材等〕

イギリス製煉瓦	157万個
セメント	4万2千樽
火山灰	7千俵
石灰	6千俵
鉄管	320本
発電機	(シーメンス社製)2基





基点: 標高280m

至: 三瀨

至: 田中・脊振山へ



廣滝東

文脊振中学校

文脊振小学校

脊振支所

標高284m

勝陣

高取山公園

標高279.6m  
基点より2700m

落差工鉄管

岩屋

政所

至: 神埼

発電所標高113.4m



①城原川取水施設  
城原川より毎秒1.8トンが取水され発電所に送られています。



②沈砂施設  
取水された水は、沈砂地で土砂やゴミなどが取り除かれています。



③白木川第一サイホン施設  
導水路は、白木川の河床約0.5m下をサイホン構造で流れています。



④白木川取水施設  
白木川より毎秒0.14トンが取水され本管に合流しています。



⑤脊振小学校東の導水路  
白木川を渡った導水路は、歩道の茶色舗装部分を通っています。



⑥道路西の導水路  
道路西側に本管が通り、現在は蓋が被せられています。



⑦導水路トンネル煉瓦構造物  
トンネル構造の導水路の出口に設けられている構造物です。



⑧第2サイホンに至る導水路  
切通状の導水路で奥にサイホン施設があります。



⑨勝陣橋下第2サイホン施設  
約10mの高低差を利用し、対岸に水を送っています。



⑩旧導水路跡  
第2サイホンより、丘陵西斜面に幅2~3mの旧導水路が残っています。



⑪第2サイホンより南の導水路  
現在の本管でコンクリートで蓋がされています。



⑫草富峠北トンネル入口施設  
トンネルの導水路で、入口に石垣と煉瓦積み構造物があります。



⑬草富峠南のトンネル出口施設  
トンネルの導水路出口に作られた石垣と煉瓦積み構造物です。



⑭水圧鉄管  
ヘッドタンクより鉄管により落差175m下の発電所へ落とされます。



⑮広滝水力発電所  
明治41年に竣工した煉瓦造りの発電所で、現在も稼働しています。



⑯石製扁額(記念碑)  
峠のトンネル構造物に掲げられていた扁額です。右:入口・左:出口